

め客観性に乏しく、かつ、眼振波形の分析も充分には行ないえなかつた。

近年、眼振の肉眼的観察に加えて、ENG記録も行なわれ、その所見の客観的分析が可能となつてきた。

しかし、その記録は通常、眼球運動の水平成分か、垂直成分かのどちらかの1つ、そして水平成分については、増巾性の関係から bitemporal 誘導が用いられている。

これらの記録条件に対して、われわれは両側眼球運動を別々に誘導し、かつその水平、および垂直成分を同時記録して、その波形分析を試みた。その結果、従来客観的資料の乏しかつた中枢障害時の眼振に関して、いくつかの独自の所見を認めるに至つた。

これらのうち、脳幹部病変に特有と考えられる所見を報告した。

## 20. 2, 3の発疹性疾患と気象との関連

(開業) 横田 登喜

菊地 寿・岩本由基枝・高木 松江

森 文子・佐藤椰子枝・船迫 亮子

中田 正愛・滝本百合子・井上 保子

(東女・小児科) ○笠井 和・菅井カクイ

私共は疾病の発病とその環境的因子、殊に気象との関係について興味をもち、気象病といわれるような疾患については、その発病し易い気象条件を調べて行けば、天気予報のように発病の警告をすることができるのではないかと考えている。それで種々の疾患の発病日又は終息日などの気象を調べてその数を増し、層別化して行く方法をとつて来た。気管支喘息の発作、いわゆる仮性小児コレラ、腺窩性扁桃炎、虫垂炎、イレウス、リウマチ熱などについて、気圧配置、月令等の関係を見出し、既に報告したが、更に症例数を増している。

今回は日本各地の8診療所、2病院の医師の共同で、麻疹、猩紅熱、水痘、突発性発疹症およびヘルパンギーナの発病日、発病状況、感染源と考えられるもの、その他を調べたので、その気象との関連について報告する。

昭和38年10月より昭和39年9月までの1年間、北海道旭川、郡山、宇都宮、東京、京都、大阪、豊岡、鹿児島等の診療所、病院を訪れた上記疾患の患児の調査である。総数は1730名、男 867名、女 863名。麻疹1036名、水痘 309名、猩紅熱71名、突発性発疹症 314名、ヘルパンギーナ170名である。年令は2カ月から13年であつた。地域別では旭川 455名、郡山 341名、宇都宮68名、東京 444名、京都 197名、大阪49名、豊岡 169名、鹿児島7名である。

以上についてその発病日、終息日、地方別の差などと気象条件との関連を報告した。

## 21. 臓器移植の基礎的研究(第1報)

(東女・第二病院外科) ○阿部 泰恒・坪井 重雄

井上 久司・梶原 哲郎・鎌田 哲郎

臓器移植において、1) 技術的問題、2) 臓器保存の問題、3) 免疫学的問題の3つが大きな問題であり、特に第3の免疫学的問題は、未だ全く解決を見ない最大の難関となつている。

われわれは、腎肝移植において、成犬を用い、皮膚移植においてはマウスを用いて、基礎的実験を行なつている。

一般に、免疫抑制剤として、イムラン、6-MP・メントレキセート、マイトマイシン、トヨマイシン、プレドニン等の薬剤を使用し、この内臓移植研究が行なわれているが、われわれは、抗癌剤であるMMC、COPP およびγグロブリンを免疫抑制剤として用い、内臓移植を行なつている。

実験は次の5群に分けている。

第1群 無処置群、第2群 MMC投与群、第3群 MMC+COPP投与群、第4群 γグロブリン投与群、第5群 MMC+COPP+γグロブリン投与群。

以上5群に分ち、基礎的問題を究明し、むろん免疫学的問題については、解決に至るものではないが、ここに若干の知見を得たので、第1報として報告する。また、併わせて、文献的考察をこれに加えてみた。

## 22. 抗腫瘍剤投与法の検討

(東女・第二病院外科) ○梶原 哲郎・井上 久司

阿部 泰恒・鎌田 哲郎・坪井 重雄

最近、第二病院外科では悪性腫瘍患者が増加し、治療法に対する工夫の必要に迫られた。今回は抗腫瘍剤投与法に検討を加え、われわれの行なつた実験と臨床応用例について述べる。

### (1) 抗腫瘍剤微量維持投与法

各種抗腫瘍剤の併用投与法を悪性腫瘍患者43例に行ない、末期胃癌2例に著明な効果が認められた。この2例はマイトマイシンC (M・M・C と略す) とコバルトポルトポルフィリン (COPP と略す) である。その内1例は通過障害があるためテスパミンの経口投与を併用し、胃内吸収より腫瘍細胞の破壊をはかつた。また動物には<sup>14</sup>Cで指標したCOPPを使用し、末梢循環増強剤である低分子デキストランと抗癌剤の併用によるCOPPの血中濃度の動態を検索中である。